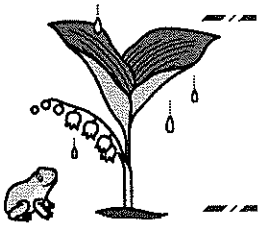
京都文教中学高等学校・宗教礼拝

礼拝（らいはい）

令和5年6月12日
2号

明るく 正しく 仲良い生活を

謙虚にして真理探究（帰依仏）
誠実にして精進努力（帰依法）
親切にして相互協同（帰依僧）



先月の二十五日は、京都文教学園　百十九回目の創立記念日を迎えました。明治三十七年（一九〇四年）浄土宗僧侶である獅谷佛定（ししたにぶつじょう）上人を中心として、私立高等家政女学校が開校されました。その後、昭和九年（一九三四年）浄土宗僧侶である大島徹水（おおしまてっすい）上人は将来の本学の発展を願い、現在の岡崎の地に一号館（瑠璃殿のある建物）を竣工してくださいました。獅谷上人や大島上人の教育の願いは、建学の精神である「三宝帰依（さんぼうきえ）」として示されました。そして、初代学園長・三枝樹正道（みえきしょうどう）先生が私たちにもよくわかる言葉で示してくださった校訓、

謙虚にして真理探究
誠実にして精進努力
親切にして相互協同

として、その精神は現在まで連綿と受け継がれているのです。

仏教が伝来したころ、日本では仏教を受け入れるかどうかで対立が起こっていましたが、後に日本古来の神々とともに崇（あが）められる対象となりました。幼いころから仏教を深く信仰していた聖徳太子はわずか二十歳で政治を行う役職に就き、天皇を中心とした国づくりをおこないました。その政策の一つとして、官人や貴族の政治に対する心得を正すべく制定されたものが「十七条の憲法」です。第二条の最初には、「篤（あつ）く三宝を敬（うやま）え。三宝とは仏法僧（ぶっぽうそう）なり」とあります。特に、世の中を治める人が守らなければならない心得として日々の務めの中で決して忘れることなく、実行していくようにと願われた大切な内容でした。

しかし、政治を行う者の中には、他の人に見つからないように秘密の内に進めようとしたり、権力を振りかざして思いのままに進めようとしたり、嘘や偽りによって人々を混乱させたり、他の悪口を広めて自分を優位にしようとする者もあったそうです。

世の中を治めていく人の中に不正があれば、その国は不正が横行する国となります。世の中を治めていく人の中に身勝手さや強い権力欲があれば、その人の独裁的な世の中となり、人々に苦悩を与えることとなります。世の中を治めていく人の中に嘘偽り、秘密や特別扱いが生まれてくると、その世の中は不平等で見通しのない世になってしまいます。その危機感を感じていた聖徳太子は、より望ましい政治を求めて、仏教の考えに基づいた国づくりをしようと考えたのでした。

では、聖徳太子が政治の中心にしようとした「三宝帰依」、そして本校の建学の精神である「三宝帰依」とはどのようなものでしょうか。

これが、聖徳太子の生涯の根幹・願いであり、本校の建学の精神であり、お釈迦さまのみ教えである真理〔仏教〕なのです。

学級活動や班活動、部活動など学校でのさまざまな活動においては、委員長や班長、部長を中心にして活動を進めていきます。その役割を担う人は責任者としての自覚のもと、またともに活動する人は協力者として、常に建学の精神を基盤として、よりよい活動になるように心がけてもらいたいと思います。また、社会の一員として、よりよい世の中のために、謙虚で誠実で親切な人へと成長してもらいたいと思います。

○生きていくために他のいのちに許しを願い、そのいのちをいただくことがあっても、争うこと、殺すこと、殺すことへの協力や支援を絶対にしてはなりません。
○生きていくために他のいのちに許しを願い、そのいのちをいただくことがあっても、奪うこと、盗むことがあってはなりません。
○他のいのちのおかげで生かされていることを自覚し、嘘・二枚舌・悪口・ごまかし・無視などをしてはなりません。
○他のいのちのおかげで生かされていることを自覚し、自己を中心とすることなく、他への心配りによって世の中が成り立っていることに気づきましょう。
○私のため、さらには多くの人々の幸せのために、惜しみなく親切にできる人を目指して生きていきましょう。